

宮崎県宮崎市（国内 30 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る  
疫学調査チームの現地調査概要（令和 2 年 12 月 19 日実施）

令和 2 年 12 月 19 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は、平野部にあり、周囲には田畑や竹藪が確認された。
- ② 農場から約 100m 南西側に川があるが、ため池等は近隣にはなかった。
- ③ 当該農場には、ウィンドレス鶏舎が 2 棟（A、B）あり、発生時には、両鶏舎で肉用種鶏が飼養されており、採卵を行っていた。

2 通報までの経緯

- ① 通常、当該農場の 1 鶏舎あたりの死亡羽数は 1~3 羽程度であった。飼養管理者によると、12 月 18 日早朝の見回りでは異常がなかったものの、昼過ぎの見回り時に、B 鶏舎内の向かい合う 2 列において、隣接する複数ケージで計 21 羽の死亡を確認したため、管理獣医師が簡易検査を実施したところ陽性となり、家畜保健衛生所に通報を行ったとのこと。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場では、通常の飼養管理を 3 名の従業員が行っており、毎日、鶏舎において鶏の健康観察を行うとともに、死亡鶏の回収を行っていた。また、集卵した卵の出荷作業は別の 3 名の従業員が行っていた。
- ② 当該農場の他、系列農場が 3 農場あるが、飼養管理者によると、発生前少なくとも数週間は、集卵部門を除き、他農場との従業員の行き来はなかったとのこと。
- ③ 集卵に携わる従業員のうち 1 名が他農場で作業することがあったが、それぞれ別の日であったことに加え、農場ごとの長靴、作業着を着用していたとのこと。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 従業員は農場とは別の建屋である更衣室で農場専用の作業着、長靴と手袋を着用していた。また、先月から衛生管理を強化し、集卵、A 棟、B 棟のエリアごとに履き物の交換と踏み込み消毒を行っていたため、更衣室の長靴から今回発生があった B 鶏舎で使用する長靴を履くまで、4 回履き物を交換する必要があった。また、鶏舎に入る際、手指消毒を行っていた。
- ② 鶏舎横には飼料タンクが設置されているが、当該タンク上部には蓋が設置されており、タンク内への野鳥等の侵入やタンク内の飼料への野鳥の糞等の混入の可能性は低いと考えられた。
- ③ 飼養管理者によると、飼養鶏への給与水は、地下水をくみ上げ、一旦当該農場専用の蓋のついた貯水タンクに貯めた後、各鶏舎に供給されていたとのこと。
- ④ 飼養管理者によると、死亡鶏については、飼料袋に 3 羽程度ずつ入れ、系列農場付近にあるドラム缶に農場の車両で毎日移動させており、集まった死亡鶏を業者が原則毎日回収に来ていたため、回収業者が当農場に入ることはなかったとのこと。
- ⑤ 飼養管理者によると、当該農場では、鶏舎ごとオールイン・オールアウトを行っており、オールアウトのたびに鶏舎内の清掃・消毒を行っていた。鶏糞は、週 3 回業者に委託し、排出しているとのこと。
- ⑥ 飼養管理者によると、車両が当該農場に出入りする際には、消毒ゲートによる消毒を行っていた。また、従業員の車両は農場外に駐車していたとのこと。
- ⑦ 飼養管理者によると、普段から鶏舎周り約 1m の幅で消石灰を散布していたとのこと。

## 5 野鳥・野生動物対策

- ① 発生鶏舎はウィンドレス鶏舎で、鶏舎の前端や側面の一部に設置されているクーリングパッドから入気し、鶏舎の後端に設置された換気扇で排気する方式であった。鶏舎の一側面は金網になっているが、外側のカーテンは常に閉鎖していた。
- ② 発生鶏舎の外壁等に目立った損傷は認められなかった。
- ③ 集卵のラインは全て建物内に設置されていた。また、鶏糞はベルトで鶏舎外に搬出されるが、ベルトは鶏舎に接した堆肥置き場内に開口していた。飼養管理者によると、堆肥置き場の開口部には金網が設置されており、出入口は、堆肥の搬出入の際以外は閉鎖しているとのこと。
- ④ 調査時に、発生鶏舎の内壁の断熱材の一部にネズミによると思われる破損を確認したが、飼養管理者によると、鶏舎内でネズミを見ることはないとのこと、調査時にも発生鶏舎ではネズミの痕跡は認められなかった。また、殺鼠剤によるネズミ対策を行っていた。
- ⑤ 飼養管理者によると、農場内でカラスやネコを見ることはあるが、鶏舎内でこれらの野生動物を見ることはなかったとのこと。